

長崎くんち今年のみどり (其の二十)

越中 哲也

昭和五十八年九月発刊の「ながさきの空十四号」に「長崎くんち今年のみどころ (其の一)」を寄稿して以来、本集で「其の二十」となる。長崎くんちの奉納踊は七年で一巡するので、今年も奉納踊については既に平成六年、平成十三年と二回も「ながさきの空」に記している。それで今年も休みにしようかと考えていたが、事務局の方より恒例に寄稿して戴いているので書いて下さいとの事。そこで旧稿を改めながら寄稿させて戴くことにした。尚、毎年の「長崎くんち」の手引書としては、諏訪町の山下寛一氏編集で呂紅社より発刊されている「長崎くんち」があるのでお読みして戴くとよい。



昭和4年 西浜町龍船

○万才町 一五七一年(元龜二)長崎開港と同時に森崎の岬に「サンタ・マリア」の教会が建ち、其の前に各地より集まった信者の町六町(大村・平戸・島原・横セ浦・外浦・分知)が開かれ、続いて博多方面より移住してきた本博多町が開かれている。然しこの地域は全て昭和二十年八月の原爆の被害をうけ全焼。現在はこれ等の町を統合して「万才町」と改め、昭和五十三年以来、長崎くんち奉納踊参加を復活されている。町名の万才町については「明治五年六月十四日・明治天皇長崎

に行幸あり島原町高木町年寄邸を行在所と定められ同十七日御召艦竜驥にて熊本に向わる。後島原町を万才町と改」と長崎年表に記してある。これにより傘鉾の飾には北村西望翁筆の万才の文字を揮毫された大盃を中心に置き、奉納踊は町名に因んで花柳寿々初師匠新趣向の「祭りを祝う長崎万才」が奉納されると言う。

○五島町 この町は昭和十年までは本五島町と浦五島町の二町に分かれていたが現在は五島町に統合され「長崎くんち」に参加されている。町名の五島町は長崎開港当時、五島のキリシタンの人達が大波止に続く海岸に移り住んでた事に始まるとされている。当然この町には二つの傘鉾があるが、中でも旧肥塚家一手持と言われた浦五島町の傘鉾は「趣味のある二つの型のかわたの虫籠を重ね、それに菊と芒を配したもので、長崎第一の気品ある傘鉾なり」と称されたと記してある。奉納踊は今年も前年に引き続き唐船がこの町の海岸に泊ったという故事により龍踊が奉納され、龍囃子と小龍には町内子ども連中が多く参加されているという。

○翹屋町 この町には大きな泉や井戸もあり、長崎では一番水量の豊かな町で、翹屋さんが多く集まっていたので翹屋町と命名したという。幕末の頃、この町に文人池島村泉がいた。彼は南画を隣町の文人木下逸雲に学び、在留の中国の文人達にも接した趣味の人がいた。其の故に、此の町の傘鉾は大いに村泉翁の影響をうけている。傘鉾飾りは中国趣味で、紅白梅献上を中心にそれに町名に因んで三枚の翹蓋を配し、その一枚一枚に当時長崎に来航してきた中国の文人除雨亭に翹屋町の町名を揮毫させている。昔の記録をみるとこの町の奉納踊「大名茶献上行列」は三百人を超す人数であったと記してある。明治四十年以後は藤間金彌師匠指導の舞台背景付の歌舞伎仕立の本踊が奉納されている。昭和三十九年以来は全町内の人々の参加を考えて川船が定着し、船頭さんの網打ちと、船の引き回しは有名となっている。

○八幡町 延宝八年(一六八〇)奉行牛込忠左衛門は「寛文の大火」後街を整備し八幡町・伊勢町の両町を延宝八年(一六八〇)命名している。八幡町の町名は同地域に天台宗の山伏大覚院存性坊が正保二年(一六四五)京都男山八幡宮より其の分神の社殿を設けて祀っていた事によると記してある。傘鉾は弓矢八幡に因んで弓と矢を中心に八幡社の遺物鳩三羽を配している。「この傘鉾は、同町に長崎三大文人の一人木下逸雲がおられたので、長崎一番潇洒な傘鉾飾」と先学達は記しておられた。奉納踊は八幡社勧請の様子を伝えてホラ貝・鉦・太鼓の音に合わせて山伏行列が長崎入港の「祝い船」を引いて登上すると言う「くんち奉納踊の古式」を良く伝えている。山伏は町内子ども連中で大正四年以来は山伏連中による剣舞も奉納されるようになっていた。

○興善町 町名については博多の豪商興善禪入が長崎開港の数年後、長崎に来たり、この町を起こしたという。然し現在の「興善町」は旧興善町を中心に旧豊後町と新町の一部が合併した町で、原爆で大半は焼失してしまつた。私は前回の本稿で、戦前より長崎くんちに協力された浅田翁、村山氏の名をあげておいた。傘鉾は戦後村山氏により新調されたもので、神前にお供えする八ツ足を中心に置き、其の上に烏帽子と神楽鈴を配し、両側にある秋の紅葉が美しい。この秋の紅葉に因んで、奉納踊は秋の石橋を織りこんで「新石橋」を前回同様、藤間欽素峰師匠指導で準備が進められてお聞きしている。

○銀屋町 今年の奉納踊町で一番早くより何か活気をおぼえたのは銀屋町の人達であった。それは、六月の「小屋入り」になってからは、毎晩のように銀屋町揃いのランニングを着た一群の人達が、私の家の前をカケ声をかけながら走ってゆかれたからである。町名は隣町の鍛冶屋、磨屋町と同様長崎の旧職人町である。然し科学者で我が国最初の写真家上野彦馬も同町の出身である。傘鉾は町名に因んで鯨の金細工置物を置きタレには男浪を織り出し金銀細工の水玉をあしらひ実に豪快な気風がある。私は若いころこれと同型の唐物香炉を見たことがあり、それには「出世鯉」と箱書があった。奉納踊は有名な大名行列で文政二年(一八一九)に開始されていたが昭和四年奉納が最後であった。本年は前回奉納で大いに好評を博した鯨太鼓が奉納される。因みに長崎くんちを、こよなく愛しておられた古賀十二郎先生も同町におられた時に「長崎ぶらぶら節」を完成されたそうである。

○西浜町 元禄十五年(一七〇二)現在の newly 地町に唐船倉庫敷が埋地造成されるまでは、浜町には波止場があり現在の電車道まで荷船が入っていたので、その周辺を浜町とよんでいた。寛文十二年(一六七二)長崎奉行は貿易配分銀の事で町々を分割したとき、浜町を東浜町と西浜町に分けている。其の昔、傘鉾は、同町旧家雪屋森家の一手持で、文化元年(一八〇四)の作。奉納踊は明治十九年より龍船が奉納され、龍船は諏訪社の踊場に入ると上部の屋型は忽ち変じて舞台となり本踊が始まる。船には昭和四年ハンドルが取り付けられたので大きく回ることもできるようになった。今回、特に注意して見て戴くものは、傘鉾の垂り(幕)に施されている文久二年作(一八六二)の長崎刺繍姑蘇十六景図と、傘鉾の輪に明治十二年来日したスウェーデンの北極探検隊長ノルデンシヨルド揮毫の英字町名があり、「今年のくんち第一の傘鉾と奉納踊ですよ」と町の人達は言われる。

風信

○県立佐賀北校の甲子園での優勝、全国の多くの人達も感激しましたね。優勝後の選手達の表情も実にのびのびとして良かったですね。○それに引きかえ横綱の話は嫌でしたね。横綱は技だけでなく他に磨かねばならぬものがあることを忘れてはいないでしょうか。○八月二十一日、「十八銀行創立百三十周年記念史料展」開会式に出席。宮脇頭取の開会の挨拶を聞き、百三十年の歴史の数々を見せて戴いた。又階上には銀行所蔵のすばらしい美術品の数々をゆつくりと見学。グラス・ロード「一五七一」を記念品として戴き帰る。

○先年来毎月第二・第四の火曜日午前十時半より本会主催で開催してきた「古文書を読む会」も長い夏休みを終え九月四日より開催、今回からは宮田修二氏、川原清氏の両氏に助講師として御加勢いただく事にし、全席すべて満席でした。○九月九日夜七時、華僑会館三山公幫の招待にて普度盆会参拝に行く。金山・銀山をはじめ、御霊の遊ばれる四堂をはじめ三十七軒商店街を見せて戴き、焰口経にも参拝させて戴いた。

